

主 題：何をいただけるのでしょうか

聖書箇所：コリント人への手紙第一 4章1－5節

「私たちはみな全く同じ報酬を受ける」とそのことを私たちは先週イエスのことばを通して学びました。弟子たちはイエスに対してこのような質問をしました。「**私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。**」(マタイ19：27)。それに対する答えとしてイエスが言われたことを私たちは前回考えました。マタイの福音書19章30節で語られたイエスの金言、そして、その後20章に続く「たとえ話」を通して、イエスははっきりと私たちに対して、天の御国に属する者はすべてみな同じ報いを受けるということを教えられました。神の御国に属する者はみな同じように永遠のいのちを受けます。彼らはみな完全な義を身にまといます。また、その御国に入る者はすべて栄光のからだを受けキリストに似た者とされます。クリスチャンはみな神の家に住みます。そして、私たちはみなキリストの花嫁となるのです。神の国に属する者はみな同じ祝福を受ける。でも、そのことを私たちが聞いた時に、皆さんの中には「それだけですか?」と言われる方がおられるかもしれません。私たちが一生懸命仕えていったその中であって、「私たちは何か特別なティアラや、色の違う特別な服をもらうことは出来ないのでしょうか? 私たちが着る衣には何か特別な線が入っていて、すばらしい働きに対するその報いは、そのような形で与えられないのですか?」とそのような思われる方がいるかもしれません。もし、皆さんがそのような思われているなら、今日、皆さんによい知らせがあります。

それは何かと言うと、実は、そのように言う一人ひとりに対する「報い」があることです。そのことを聖書は教えているのです。確かに、皆さんの頭に載せることが出来るティアラがあるのです。皆さんの服の色がひょっとしたら違うかもしれません。皆さん、興味ありますか? 知りたいと思いますか? 皆さんはどのような報いを受け、いったい、だれがその報いを受けることができるのでしょうか? 皆さんに興味をもっていたきたいと思います。なぜなら、私たちが今日学ぶことはまさにそのことだからです。そして、皆さんは興味をもつべきです。なぜなら、これは私たちがどのように主に仕え、どのように生きて行くべきかを私たちに明確に教えることでもあるからです。

パウロはこのコリント人への手紙第一4章を書く前に、すでにこの手紙の中で幾つかの事柄を書き留めていましたが、このコリントの教会の中にあつた一つの問題に焦点を当てています。それはコリント教会の人たちが人間に対して誇りをもっていたということです。その誇りのゆえに、教会の中には分裂がありました。ある人たちはパウロにつき、ある人たちはアポロにつき、ある人たちはペテロにつくという、そのようなことが実際に行われていたのです。そのような問題がコリントの教会の中には存在していました。それに対してパウロは「そのようなことをしてはいけない、私たちの誇りはキリストになればならない」ということを教えて来たのです。また、パウロははっきりとクリスチャンである仕える人たち、それが使徒であろうとそれが教師であろうと、牧師であろうと教会のリーダーたちであろうとも、それらの人たちはお互いに競い合つてはいけないということを教えて来ました。だれが偉くてだれが偉くないとか、だれがすばらしくてだれがすばらしくないとか、そのような競争をするのではないと、パウロは3章までに語って来たのです。そして、これらの事柄をまとめるに当たってパウロはこの4章を書いて行きます。そこでパウロははっきりと、コリントの人たちがパウロ自身を、また、パウロ以外の他の働き人たちをどのように捉えるべきかということを教えているのです。

今日、皆さんと見て行く箇所には、非常に多くの事柄が記されています。正直、今から見ようとしている4：1－5に記されていることを、皆さんに忠実にすべてを説き明かそうとするなら、非常に長い時間がかかってしまうでしょう。けれども、今日私たちは特にここから神が私たちに約束されている「一人ひとりへの報い」について、そのことに焦点を当てて、ごいっしょにこの箇所を見て行きたいと思います。私はこの箇所を三つに区分しました。1. いったいだれに報いが与えられるのか。2. いったいだれから報いが与えられるのか。3. どのようにこの報いは与えられるのか、その報いの与えられる基準です。そこで私たちはこの報いがいったい何なのかを皆さんといっしょに見て行きたいと思います。これらの事柄は私たち個人個人がどのような報いを受けるのかということをはっきりと示すだけでなく、私たちが主に仕えるに当たって、どのような焦点をもって生きて行かなければいけないかを明確に示してくれます。このことを学ぶことを通して、私たちが正しく主に仕え、主からの豊かな報いを受けることができるように、そのためにこの箇所を見て行きましょう。

☆個人的な報いについて

I コリント4：1－5にはこのように記されています。「**こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、**

また神の奥義の管理者だと考えなさい。:2 このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。:3 しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。:4 私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるのではありません。私をさばく方は主です。:5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごともしっかりと明かにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」

1. だれに報いが与えられるのか

最初に、私たちは「いったいだれがこの報いを受けるのか」、そのことを考えたいと思います。もし、ここで皆さんに、皆さんが考える最高の信仰者に与える最優賞というのがあったとして、それはいったいだれが受けるべきかという統計を取ったなら、皆さんが出されるそのリストの一番上にはきっとこの人の名前が入っていると思います。それはパウロです。パウロは非常に豊かな教育を受けすばらしい知恵と知識をもっていた人物でした。彼は道徳的に人から指されることなく、律法に関しては完璧な人間であったと自分自身も他の人たちも認めています。彼は何よりもキリストによって直接指されて「あなたはわたしの使徒になりなさい」と言われて、異邦人のための使徒として活躍した人物でした。また、彼は中近東において多くの教会を建て上げたすばらしい伝道者でした。それだけではありません。彼の手紙の多くは今現在も新約聖書の中に収められています。神の靈感を受けたすばらしい著者として、その名をこの人類の歴史に残しています。いや、人類の歴史ということを考えるなら、キリストの復活以降、この地上にパウロほど人間に影響を与えた人物はいないと言っても、ひよっとしたら過言ではありません。パウロは多くのすばらしい功績を残しています。そして、私たちが報いということを考える時に、その報いが与えられるべき人物とはどのような人ですか？と問うなら、私たちはパウロを選ぶのではないのでしょうか？なぜなら、私たちはこのようなすばらしい功績があればすばらしい報いが与えられると考えます。このようなすばらしいことを行なうすばらしい人物だから、それに対して当然の報いが与えられると。

けれども、パウロはそのようなことを考えてはいませんでした。パウロはクリスチャンが生きて行くに当たって、そのようなことは一切関係ないと私たちに教えてくれるのです。事実パウロは、自分自身が信徒の間で偉大な者だとは考えていませんでした。むしろ、その反対だったのです。ここでパウロは私たちに対して、報いを受ける人は人々の中で偉大な人ではなく、むしろ、最も低いしもべであると言います。パウロはここでその報いを受ける人物は「キリストに仕えるしもべ」であると私たちに教えてくれます。そして、その中で二つの表現をもって、私たちはどのような人物であるべきか、具体的にどのような人がこの報いを主から豊かに受けることができるのか、そのことを明確に示しています。

1) 主人に従属しているしもべに与えられる 1 a 節

「こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、…と考えなさい。」、パウロはここでコリントの人たち、コリントの信徒たちが使徒たちや他の働き人をどのように捉えるべきか、考えるべきかということを見せています。事実、この箇所原文を見ると、単に、コリントの人たちだけがそれをするのではなく、あらゆる人々がするべきだということが示唆されています。すべての人たちがパウロ、またパウロのように主に仕える人たちをこのように捉えるべきだということです。そして、今朝私たちがいったいだれが報いを得るのかを考えるに当たって、非常に重要なことばがここで使われているのです。それは「しもべ」ということばです。

(a) しもべ：I コリント 3：5でもパウロはこのことばを使っています。「アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰にはいるために用いられたしもべであって、主がおののちに授けられたとおりのことをしたのです。」、けれども、実は、この3：5で使われている「しもべ」と4：1で使われている「しもべ」ということばは、同じことばで訳されていますが、二つの全く違う単語なのです。3：5の「しもべ」はディアコノスということばです。このギリシャ語は私たちが教会でよく使う「執事」ということばの元になっていることばです。これは「給仕をする、また、いろいろな働きに仕える」という意味合いがあります。ある神学者はこのことばを取って「これは特にしもべが仕えるその働き、しもべによって為されている働き、そのことを表わすために用いられることばである。」と言います。このことばは一般的によく使われることばで、パウロもよく使うのですが、パウロは3：5でこのことばを使って、自分自身、また、アポロのことを指していながら、4：1ではこのことばを使わないのです。私たちがここに違う単語が出ていることをなぜ重要視するのかというと、聖書は神の靈感によって書かれているからです。そこに書かれている単語の一つ一つは、偶然にそこに並んでいるのでも、パウロが同じことばを何度も繰り返し使うのが嫌だからスタイルを変えようとして使ったのでもありません。そこには明確な意図、明確な目的があるのです。一つ一つの単語が用いられているその意味を私たちは考えなければいけません。しかも、4：1で使われている「しもべ」ということばは、実は、パウロがその全

書簡の中でもここでしか使っていません。ここに一度しか出て来ない単語なのです。特別な意味があるのです。そのことばは「フペレテス」です。このことばには非常に興味深い背景があります。このことばは二つの単語で構成されています。一つは「～の下に」ということば、そして、もう一つは「漕ぐ」です。二つを合わせて「下で漕ぐ者」という意味が元々はあったのです。これだけを聞いても皆さんはこのことを想像することが出来ないかもしれませんが、多分、皆さんは映画や絵画などで見たことがあるのではないかと思います。特に「ベン・ハー」という映画を見られた方はその状況を想像することができるのではないかと思います。当時、いやもっと古い時代からあったのですが、ガレイ船というものがありました。ガレイ船には船の下層部分に小さな小窓がたくさん開いていて、そこからオールが出ているのです。漕ぎ棒を握って一生懸命漕いでいる姿を想像することが出来るでしょう。それがこの「しもべ」ということばが表わしているものです。下で漕ぐ者、特に、三段廻船と呼ばれるような、三層、つまり、床が三つあるような大型のガレイ船の一番下の底の部分で漕いでいる者たちを指して使われていたことばだと言われています。

このような船は多くの場合に戦いで使われました。何層もあってそこに漕ぎ手がいる船は、その漕ぎ手が漕ぐ力によってスピードを得て、そのスピードを利用して他の船に正面衝突して行くのです。そうすることによって相手の船を沈めるのです。ここで漕いでいる者たちは戦士ではありませんでした。彼らは兵隊ではなかったのです。彼らは奴隷でその下層部分で上官たち、彼らの監督の命ずるままに、漕ぎなさいと言われる時はひたすら漕ぎ、止めなさいと言われたらただ黙ってオールを手にしていただけだったのです。彼らが働いていた船は多い時には200人位の漕ぎ手がいるような船でした。200人近い漕ぎ手たちが横一列に並んで、何人かで一本のオールを持ちながら出来るだけ速いスピードを出そうと一生懸命漕いでいたのです。彼らが働いていた環境は劣悪なものでした。皆さん想像出来ますか？大きな船と言っても今あるような大型船ではありません。人々がぎゅうぎゅう詰めになって、汗を流しながらその汗の匂いでむせかえる湿気に満ちた環境状況の中で、彼らは休むことを与えられず、休めばムチが飛んでくる中でオールを漕ぎ続けていたのです。彼らの働きをだれ一人認める者はいませんでした。それを称賛する人たちもいなかったのです。パウロがこの手紙を書いたその時代には、もうすでに「しもべ」ということばにこのガレイ船の下層部分で漕ぐ者という意味合いは含まれなくなっていました。具体的にその人たちを指しているのではなかったのです。

では、そこにはどのような意味が残っていたのでしょうか？実は、上官の命令に従ってしなければならないことは何でもするという、「従属」という意味が強く残っていたのです。ですから、ここでは確かに「しもべ」と訳されるのですが、ここでは何かの働きを指すというよりも、主人の命令に絶対的に従い続ける「従属」を指すことばです。そのような意味があるのです。パウロは言います。「それはあなたがたが私を見た時に考えるべきことです」と。多くの場合、私たち人間は有名になること人々から認められることを考え願います。そして、そのことがまさに私たちのいろいろな働きをすることの原動力となることがあります。世の中においては特にそうです。私たちは自分のやっていることを人々に認めてもらいたいのです。ところが、パウロはここで言います。「あなたたちは私を最下層で漕ぐ者として、主人の言うことを何でも聞くしもべとして捉えなさい。」と。だれ一人として下で漕ぐ者たちを認め、彼らの働きを誉め称える者はいませんでした。なぜなら、彼らが一生懸命仕事をするのは彼らがしなければならないことをやっているだけのことで、何かの称賛を得るようなことではなかったからです。そして、そのような人物こそが神からの報いを受けるのだとパウロはここで言うのです。

(b) キリストのしもべ：パウロはここで「**キリストのしもべ**」と書いています。パウロははっきりと彼の主人がだれなのかを告げているのです。このことは非常に重要です。パウロは私たちがいったいだれに属しているのかを教えているのです。「キリストに属するしもべ」だと言います。私たちは多くの時に「人々に仕えましょう」と言いますが、パウロは「私はあなたたちに仕えているわけではありません。私が仕えているのはキリストです。」と言います。マッカーサー先生はある時このようなことをおっしゃいました。「私がキリストに仕えているときに私が最高の形で人々に仕えているときだ。けれども、もし、私が人々に仕えんとするならば、私は主に最善の形で仕えることが出来なくなる。時に、他の人たちの必要を満たすことに余りにも熱心になり過ぎると、人は神が命じていることに妥協することがある。けれども、もし、主に仕えることを常に行なっているとすれば、私は主に属する人々に最高の働きを為すことが出来る。」と。皆さん、この通りです。私たちが他の人たちに仕えるようになれば、神を主人とするのではなく他の人たちから称賛を得ようとか、他の人たちからの認知を得ようと思って働きを始めることになり、私たちは神が命じていることに忠実に従うことが出来なくなります。パウロは言います。「私はキリストのしもべである、私の主人はキリストである。」と。

報いを受けるその人は、一人の主人に仕える人です。心からその主人に対する献身をもち、その方の命令を忠実に実行する者です。多くの人たちはパウロのような地位にいる人たちを尊敬し、彼の働きを

称えます。パウロはイエス・キリストの使徒でした。異邦人全体のために立てられた偉大なる使徒です。彼はすばらしい説教者で偉大なる教師でした。彼はみことばを書き記しました。靈感を受けたことばを書くことが出来る著者でした。けれども、そのパウロが言うのです。「私は単なる最下層のしもべではありません。私はただ主が命じることを行なっているだけです。」と。皆さん、考えてください。もし、私たちが単に神が私たちに命じることを行なっているだけだとするならば、いったい、どこに誇るものがありますか？何を誇りとしますか？誇ることなど何もないではありませんか！私たちがしていることは、私たちがしなければならないことであって、特別なことではありません。でも逆に、もし、私たちがしなければならないことを行なわないならどうでしょう？そこにあるのは罰ではありませんか？だから、私たちが神の求めていることを行なっているとしても、いったい、どこに称賛があるのでしょうか？私たちは「しもべ」でしかないのです、私たちは主に従属する仕える者でしかないのです。だから、私たちは喜んで、神が命じることを「はい、分かりました。」と言ってやるべきです。そこに何も高慢の種も自慢の種もありません。私たちはただ神が求めることを行なっているだけです。

確かに、私たちはパウロのように使徒ではありませんし、ここにいらっしゃる多くの皆さんは、アポロのように牧師でも教師でもありません。けれども、私たちはパウロと同じように、自分自身を主の「フペレテス」と思わなければいけません。最下層の従属するしもべだと。なぜなら、神は私たち一人ひとりにも仕えることを命じておられるから、神の働きを為すことを命じておられるからです。そして、私たちはそれを行なうに当たって、何一つ誇ることはないのです。なぜなら、私たちはただ主が命じることを行なっているだけだからです。

2) 良い忠実なしもべに与えられる 1 b 節

だれが報いを受けるのか、パウロは「**また神の奥義の管理者だと考えなさい。**」と言います。私たちは単に従属するしもべであるだけでなく、自分たちのことを管理者だと思わなければいけないと言います。ここで使われているこの「管理者」ということばは、元々「家を管理する者」という意味があります。ここでもパウロはまた、自分が所有者ではなく、主人に仕える管理を任されている人物だと言うのです。

(a) 恵みの良い管理者として

神は確かに私たちに多くの責任をお与えになり、多くの賜物を与えてくださいました。ペテロはⅠペテロ4：10でこのように言っています。「**それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。**」、ここでペテロは、私たちは神から賜物を受けているのだと言います。特に、ペテロが言うことは「**霊的な賜物、御霊の賜物**」のことです。私たちはそれを神から与えられているゆえに、私たちはそのすばらしい恵みの良い管理者として生きなければいけないというのです。私たちはみな管理者です。神は私たちにすばらしい賜物を与えてくださって「**その責任を持ちなさい。それを管理しなさい。**」とおっしゃっているのです。

聖書においてこの管理者という概念は非常に良く登場する概念で、皆さんも親しみがあるでしょう。管理者というのは、多くの場合に主人の家のこと、主人の仕事のことを主人の代わりに任せられる人です。イエスはこの管理者ということばを使ってよくたとえ話しをされました。例えば、タラントの話です。神は私たちに對してご自身の恵みを様々な形で与えてくださり、私たちがその主のものの管理者として生きることを求めておられるのです。そして、パウロはここで特に、パウロ自身が何の管理者なのかということを明確にしています。ここで言っているのは「**神の奥義の管理者**」です。この「奥義」ということばは、単純に言うなら「**以前は隠されていたけれど、今明らかにされていること**」と定義づけることが出来ます。もっと簡単に分かりやすく言うなら、それは新約聖書のことです。Ⅰコリント2：6-7を見てください。「**しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。：7 私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。**」、実は、パウロは神の知恵としてこの奥義をコリントの人たちに対して語っていたのです。神がこの世の始まる前からあらかじめ定めておられたそのすばらしい真理は、パウロが語り始めるまで隠されていました。けれども、パウロは「**それを今告げているでしょう**」と言っているのです。

何のことでしょうか？具体的に何のことを話しているのでしょうか？パウロが言っているのは新約聖書の啓示のことです。教会の真理のこと、福音のことばのことであり、神のみことばです。管理者の責任というのは、この神のみことばを注意深く管理し、それを正しく用いることです。神の家が守られ、それが成長して行くために、この神のみことばをしっかりと管理し、それを用いて行くことです。それがパウロがここで言っていることです。これこそまさに彼が行なって来たことで、彼が人々に行なうように求めたことでした。使徒の働き20：20で、パウロはエペソの長老たちに、まさにこのことをパウロがエペソにいたときに行なっていたことだと告げています。「**益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、**」。また、パウロはⅡテモテ4：2でテ

モチに対してこのように言いました。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」、なぜならば、そのことが管理者に求められていたことだからです。

(b) 管理者はどのように働きを為すのか 2節

ではいったい、どのようにそれが行なわれるべきなのでしょう？そのことが2節に記されています。管理者はどのようにその働きを為して行くのでしょうか？パウロは言います。「このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。」、だれが報いを受けるのでしょうか？報いを受けるのは、従属するしもべでした。そしてパウロが言うのは、報いを受けるのは忠実な誠実なしもべだということです。管理者の責任、管理者に要求されていることは、忠実であること、誠実であると訳することが出来ますが、そのことです。ここで使われていることばがもっている意味は、「言われたことをその通りに行なう」です。そのことがまさに良い管理者と悪い管理者を区別する基準であったのです。

このように考えることが出来るかもしれません。皆さんは何か全国にチェーン展開しているレストランのマネージャーだとしましょう。マクドナルドでも構いません。そのようなチェーン店であるゆえにそこには特定のマニュアルが存在します。このように食事を準備し、このように接客を行ない、このように店の清掃はしましょうと、そのことがこと細かく書かれてあります。そして、その店のマネージャーである皆さんはそれに沿って行動すべきなのです。良いマネージャーとして生きて行くためには、そこに記されているマニュアル通りに行動を取ることです。ですから、皆さんは特別なメニューを作ったりしないのです。メガ月見フィレオブッシュは作らないのです、勝手に。ハンバーガーストロベリーシェイクはやらないのです。私たちにMのロゴをひっくり返してWにすることは出来ないのです。管理者に求められていることは「忠実さ」です。そして、管理者は忠実に主人の命令に沿わなければいけないのです。皆さんがこの話を聞くと「そんなばかげたことをするわけはないじゃないですか。」と言われるかもしれません。けれども、私たちは多くの時に、主の前に生きて行くとき、主に仕えるに当たって自分たちのために特別なメニューを作っているのです。私たちは多くの時に様々なプレッシャーに負けてしまって、いろんな事柄に妥協して、「これ位はいいか」と言うのです。ひょっとすると皆さんがマネージしているそのお店に、何時も来てくれる皆さんが大好きなお客さんがいたとしましょう。その人が「実は今度是非メガ月見フィレオブッシュを食べたいのですが…」と言ったとして、私はあなたのことが大好きだし、美味しそうだし彼もきっと感謝して食べるだろう。作ってあげたら喜ばれるに違いない、「彼のために一度だけ作ってあげましょう。それでどうなるか見てみましょう。だれもそのことを知らないし、気付くはずもない。いやひょっとしたらもの凄く美味しくそれが大ヒット商品になるかもしれないから、是非それを作って食べてみましょう。」と、そのようなことはありませんか？皆さんがいろいろな方々と接する時、皆さんの友人と接する時に、皆さんの職場で上司や部下と接する時に、皆さんの家庭の中で家族と接する時に、いや、教会の中で皆さんが互いに仕え合おうとするときに、「神さまはこのように言われる、けれども、これぐらいは大丈夫、いやー、こうした方がもっとこの人には合っているから。」と、そのようなことを言って、私たちは主がしなさいと言うことをやらないことが余りにも多いと思いませんか？

良い管理者は、忠実な管理者です。主人の命令にとどまり続ける人です。管理者が報いを受けるのは、その人が独創的だからではなく、彼が忠実な誠実なしもべだからです。確かに、人間的な事柄を考えるなら、人間が与えた指示であるなら、そこにはより良いものを作る余地があるかもしれません。でも皆さん、だれが私たちに指示を与えていますか？だれが私たちにマニュアルを作ってくれたのですか？神のみことばに私たちの知恵をそれに加えて、それをより良くすることが出来ると思いますか？皆さんは神の家を任された管理者です。神から与えられた賜物を忠実に管理しそれを用いるしもべです。神は皆さんにもみことばというすばらしい賜物を与えました。皆さんにもこのみことばを通してそれをしっかりと守り、それに留まりそれを人々に正しく適用し、自らの人生にも適用しなさいと言います。それが皆さんに求められていることなのです。何か独創的になったり、特別なことをすることが私たちが報いを受ける根拠になるのではありません。唯一重要なことは、私たちが主が語られた事柄に忠実であり、それを忠実に誠実に用いて行くことです。どうですか？皆さんは忠実な管理者ですか？忠実なしもべですか？皆さんはみことばを十分に良く管理しておられますか？それをもって自分の生涯を治め、他の人たちの生涯を助けようとしていますか？皆さんは自分の生涯においてみことばを妥協し、自分たちの願いを叶えるため、いや、他の人たちの願いを叶えるためにそれを曲げていませんか？もしそうなら、私たちは報いを受けることはできません。報いを受けるのは良い忠実なしもべだけだからです。

だれに報いが与えられるのか、今私たちは見ました。従属するしもべと忠実なしもべです。

2. だれから報いを受けるのか 3-5 a節

パウロはここで、報いを与えることがない人たちと、そして、報いを与える人がだれなのかを教えて

います。順番に見て行きましょう。

1) 報いを与えることがない人

いったいだれから報いが来ないのか？

(a) 他の人による判定

一番目に上げているのは、報いは他の人たちから来ないということです。パウロのことばを見ましょう。3節「しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。」ここで私が皆さんにはっきりと告げなければいけないことはパウロはここで罪のことを話していないということです。聖書の教えは、もしだれかの内に罪を見たら、その罪はさばかれなければいけません。その罪を指摘しなければいけないし、その罪は解決されなければいけません。だから、パウロは「たとえ、私が罪を犯していたとしてもそれに対してあなたが私に何を言っても私には関係ありません」ということを言っているのではありません。パウロがここで言っていることは今までの文脈の通りです。他の人たちが彼を見てどう思うのかということにおいて「私は一切気にも留めません」と言っているのです。コリントの人たちだけではありません。およそ人間による判決を受けること、あらゆる人々からの吟味を「私は気にしません」と言うのです。

ここで使われている「判定」ということばは、さばきというよりも「検証すること、吟味すること、調査のプロセス」のことです。つまり、いったいどのような人物なのかを判断しようとするその過程自体が私には気にならないことと言うのです。あなたたちが私のことをどう思おうと気にしないで。皆さん、これは非常に驚くべき告白です。なぜなら、皆さんが自分の胸に手を当てたならよく分かるように、私たち人間は他の人が自分のことをどのように思っているのかが非常に気になります。私たちはこのことに多くの問題を抱えています。他の人たちが自分をどんなふうに見るのかということ、私たちの心を悩ませるものです。けれども、パウロはここではっきりと言います。「私はあなたたちがどう思っていようと気にしません。」と。なぜなら、彼はだれの目を気にしなければいけないかということが良く分かっていたからです。

パウロは自分が管理者としてどうであるのか、良い者であるのか悪い者であるのかは、コリントの人たちが自分の働きを見て判断できることではないということを知っていたのです。パウロはキリストのしもべでした。だから、彼の働きを唯一判断できるのはキリストだけなのです。キリストが彼に対して働きを与え、キリストが彼に働きの詳細を示し、キリストが彼の働きがどうであったのかを唯一判断することができるのです。皆さん、私たちは他の人たちの目を気にします。私も気になります。「良かったです、すばらしいです。」と言われると嬉しいし、イヤという顔をされると悲しいです。皆さんがどのように受け取ってくれるのか、この働きがどうなのかと気になることがたくさんあります。パウロは言います。「でも、私はそんなことは気にしません。なぜなら、私がどのような働きをしてそれを皆さんがどう捉えようとも、それによって私が報いを受ける訳ではない。」と。私たちはそのことをよく覚えておかなければいけません。私たちは他の人たちから報いを受けるのではないのです。

(b) 自分自身による判定

また、パウロは続けます。3b節「事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。」、いったい、だれから報いが来ないのか？他の人たちから来ないだけでなく、自分自身からも来ないと言います。ここでパウロが言っていることは、パウロは他の人たちが自分のことをどう見るのかを気にしないだけでなく、自分自身が自分のことを見てどう思うのかということも気にしない、それも関係ない、気にすることではないと言うのです。実際、ここで起こっていたことを考えてみるとそのことがよく分かります。パウロはコリントの教会の中で起こっていた問題がよく分かっていました。ある人はパウロにつくといい、ある人はアポロにつくといい、ある人はペテロにつくとそのようなことを言っていたのです。多くの人は実際にはパウロにつくよりも他の人についていたのです。パウロはコリントの教会ではどちらかと言うと憎まれっ子だった訳です。コリント人への手紙第二を見るとよく分かります。パウロは自分がどれだけ良い働きをして、どれだけ忠実に主に仕えたとしても、その働きを見てあなたたちが私の働きを評価するときに、あなたたちは必ず「パウロは嫌いだ」というメガネをつけてその働きを見るから、私のことを好きだとは言わない、すばらしい働きだと言わないでしょうと言うのです。逆に、自分が自分の為した働きを見る時には、私は「私のことが好きだ」という色メガネをつけて見るのです。皆さんよく言いませんか？「私は今日は自分に褒美を与えよう。自分にプレゼントしよう！」と。自分にプレゼントをすることは結構ですが、それはプレゼントを受けるほどのすばらしい働きをしたときにすれば良いのです。でも多くの場合、自分にご褒美を！というときは、実は、他の人がそれをして他の人に褒美を上げるようなことをしている訳ではないのです。自分は自分に対して非常に甘い存在であると皆さん思いませんか？皆さんは自分の心を完全に100%正しく吟味することが出来ると思いますか？

パウロは吟味しなさいと言います。吟味することは大切なのですが、パウロが分かっていたことは、

どれ程自分が自分のことをよく吟味したとしても、自分は100%正しく自分のことを知ることはできないということです。いつも自分の側に立って判断をしているからです。だから、パウロは言います。

4節「私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるのではありません。」、自分の良心が潔癖だとしても、自分の良心が責めることがなかったとしても、だから、あなたは素晴らしい働きをしていると宣告される訳ではないのです。自分が報いを受ける受けないの基準を定めるのではありません。ひょっとすると、私たちの多くは、もし自分が自分に対して報いを与えることが出来る人物だとするなら、私たちはものすごく豊かになっていると思いませんか？でも、パウロは「違う」と言います。報いを与えるのは他の人たちではない、自分でもない、では、いったいだれが報いを与えるのでしょうか？

2) 報いを与える人とは？

それはパウロはひとりで言います。4b節**「私をさばく方は主です。」**と。神だけが、キリストだけが、私の主人だけがそれをする事が出来ると言うのです。報いは主からのみやって来ると。パウロは続けて言います。5節**「ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。」**、ここで使っている表現は、コリント教会の信徒たちがあらゆるところでもうすでにこのようなさばきをしているということを前提に話をしています。「だから、そのようなことをするのをもう止めなさい。」と言うのです。「あなたたちは無駄なことをしている、あなたたちがどれ程、この人が素晴らしいとか、あの人は素晴らしいと言っても、それは一切意味がないことだ。」とパウロは言うのです。本当のさばき、本当の評価はいつ来るのか、それは神が実際にやって来られて、そのことをさばかれるその日に主がそれを為してくださると言います。それがパウロがここで教えたことです。

パウロは自分が単なるしもべでしかないことがよく分かっていました。そして、自分の主人だけが自分の働きを正当に評価することができるのと知っていたのです。だから、パウロは人間の観点に基づいた評価をすることを止めなさいと言うのです。「だから私は他の人の評価を気にしません。いや、自分自身の評価も気にしません。ただ、主が現われるときに、すべてのしもべは主によって吟味される。」と言うのです。神だけが唯一、私たちが考えていなければいけない方です。神だけが私たちに正しく評価し、神だけが私たちにさばくのです。最後に、どのようにその評価は下るのでしょうか？

3. どのように報いが与えられるのか 5b節

パウロは続けます。5b節**「主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」**、皆さん、分かりますか？本当の正当な素晴らしい正しい評価は、人間によっては行なうことが出来ないのです。なぜでしょう？それは隠れた事柄に対する評価だからです。単に、私たちが見えない所で行なっているあらゆる事柄が、表に出されてその事実が現われるということだけでなく、表で見えていることも見えていないこともすべて、それが何の目的でどのような動機で為されたのかを神が判断すると言うのです。だから、人間にはそれが出来ないのです。私たちには見えていることしか分からないし、心の中の動機まで完全に知ることはできないからです。私たちの心の中にあることがカギなのです。それが私たちがどのような報いを受けるのか、いや、報いを受けるのか受けないのかが決まる基準なのです。主がやって来られてさばきをするその日、主は私たちが見えないことをすべて明らかにし、すべて隠されていたことを明るみに出し、私たちの心の動機を探って、それに対して評価を下されるのです。神だけがあらゆる事実を知っています。そして、神だけがそれがなぜ行なわれたのかを正確に理解しているのです。そして、それに基づいて神は私たちに評価を下されます。

いったい、どのような評価でしょう？パウロは言いました。**「神から各人に対する称賛が届くのです。」**と。前回見たように、私たちにはみな同じ報いが与えられます。救われている者はみなすべて永遠のいのちを受けます。救われている者はみな神の義を受けます、義とされます。救われている者はみな、神の家に住み、神の栄光を受けて、栄光のからだに変えられてキリストに似た者となります。それが約束されています。でも、それは一般的な報いで、個人個人の報いがあるとパウロは言っています。「各人に神からの称賛が与えられる。」と。この称賛というのは、いや、この称賛こそが私たち一人ひとりが主から受ける素晴らしい報いである訳です。

私たち人間は、自分たちの功績を出来るだけ多く示したいと願います。数人しか救われないことよりも、五千人でも一万人でも何万人でも救われた方がすばらしく見えるではありませんか？人間的に考えるなら、十人しかいない教会よりも、五百人も千人も一万人もいるような教会の方がすばらしく見えるではないですか？けれども、パウロは言います。「それらは一切主の前に評価されるにあたって関係のないことだ。」と。皆さんは言うかもしれません、「私はこんなにたくさんの働きをしました。こんなにやって来ました！」と。でも、パウロは言うのです。「それは一切関係ありません。問題はあなたがなぜ、何のためにそれらをしたのか。また、それらをしていなかったときに皆さんが何をして来たのか。」と。

私たちの心の中にあることに基づいて主は私たちに報いを与えます。私たちが行なったことによるのではなく、私たちがしたことを私たちはなぜやって来たのかという、その動機に問題があるのです。皆さん、何のために神に仕えていますか？皆さんが仕えるのは人々から好感を得るためですか？人気を博すためですか？有名になるためですか？皆さんが仕えるのは自分の満足のためですか？「こんなにたくさんあなたのことをやって来た！」と。皆さんが仕えるのは、そのような責任が私に与えられたからそれを果たさなければいけない、しょうがないからやります、ですか？皆さんが仕えるのは、自分が得たいものを得るためですか？それが例え何であつたとしても…。皆さんが仕えるのは、自分のプライドや自分の欲求のためですか？それとも主のために主のすばらしさを現わすために仕えておられますか？

皆さん、私たちはみな主の奴隷なのです。私たちは全員同じように主のしもべであつて、そこに何か格差がある訳ではないのです。ランク付けされているのではないのです。確かに、私たちには多くの違う役割が与えられています。違う役割がある以上、そこには違った責任があるでしょう。でも、だれもがみな同じように主のしもべでしかないのです。そして、私たちが様々な働きを為しているのは、人々からの称賛を得るためでも、自分たちの求めていることを得るためでもなく、ただ、私たちの主がそれをしなさいと命じておられるから、私たちは喜んで「はい。それを行います。」と言うのです。私たちには管理すべきものが与えられています。私たちには責任が与えられています。私たちの果たすべき役割があります。そして、主が私たちに求めるのは、それらの事柄に忠実で誠実で純粋な動機をもって主に仕えることです。

主からの称賛が私たちの報酬だと言いました。その報酬、称賛というのはきつとこのことばに表わされると思います。「よくやった、良い忠実なしもべだ。」と。皆さんここに驚くべきことが書かれていることに気付きますか？「よく」というのは、私たちが行なったわざの価値を表わしています。それがすばらしいものだ、良くできた、「あなたの働きは十分賞賛に値する良いものだ」と言ってくれているのです。

「やった」とは、やり遂げたその働きの成果が表わされています。神が与えてくださった事柄を私たちは一生懸命にやったのです。実際にそれが行なわれたのです。それが評価されているのです。「良い忠実なしもべ」ということばは、私たちがそれをするに当たってどのような人物であつたかということです。良い人だつた、正しい人物だつた、そして、忠実だと言うのです。どんな困難があつたとしても、どんな問題があつたとしても、与えられた責任を正しく主の前に全うし切つた人です。

皆さん、私たちは神からそのように言われたいですね。私たちが主の前に出たときのことを想像出来ますか？イエスが私たちに対してそのことばを言うてくださるその瞬間を…。私たちが天にあげられて主の前に立つときに、パウロやペテロなどの使徒たち、偉大な信仰者たちといっしょに名の知られていない多くの信仰者たちがその前に立ちます。そして、彼らはそこで言われるのです。「よくやった、良い忠実なしもべだ。」と。私は心から自分がその中に入っていればと思います。皆さんといっしょにその列に加わつて、私たちの愛する主から「よくやった、良い忠実なしもべだ。」と、そのように主からの称賛のことばを聞きたいと思います。そして、そのときに私たちはみな同じように言うのです。「いいえ、違います神さま。感謝すべきはあなたです。なぜなら、あなたが私を救ってくださり、あなたが私を変えてくださり、あなたがその働きを出来るようにしてくださったから、あなたが今言われたような働きを私は全うすることが出来たのです。」と。

願わくは、心からそのように主の前に感謝を現わすことが出来る者になりたいと思います。